

雪椿通信

vol. 57



高村真夫《女》1920年代後半

2024

日本が見たドニ
ドニの見た日本■新たなドニ展を
もとめて

モーリス・ドニ研究の第一人者
ジャン＝ポール・ブイヨンが、かつ
てドニ展図録の中で嘆息するよ
うに書いていた言葉に、強い印象
を受けたことがありました。

一いかなる展覧会も、ドニが後半
生のエネルギーを注いだ偉大な
装飾の仕事を正當に伝えること
はできない—

本当だろうかという驚きの気持
ちと、なるほどと納得する気持ち

が、自分の心の中で相半ばしたのをおぼえています。
モーリス・ドニ(1870ー1943)といえば、ナビ派の
中心的画家です。19世紀末フランスの前衛美術を
担った一人として、西洋美術史の中で確たる位置を
占めており、また画家としての活動だけでなく、美術
批評家としても顕著な功績を残しています。その芸
術家を(どのような分野であれ)紹介する展覧会が、
母国フランスで開くことができないという告白にとて
も驚きました。

一方どこか腑に落ちるような思いもありました。
1900年以降、即ちナビ派としての活動が沈静化し
てからのドニの仕事は、最前線から後退したことも
あり、美術愛好家の関心の対象からやや外れていっ
た面があります。創作の場もアトリエにとどまってい
まませんでした。1913年に竣工したパリ・シャンゼ
リゼ劇場の天井画を一つの頂点として、ドニは数多
くの建築の装飾を手がけています。1908年に開校
した画塾アカデミー・ランソンでは美術教育に情熱
を注ぎ、1919年からは宗教美術の復興という事業
にも取り組んでいます。社会に向かって大きく開かれ
たその軌跡を追うことは容易ではなく、ドニの生涯
を正當に伝える展覧会を開くことがいかに難しいか
が想像できます。

冒頭で触れた展覧会は、1994年にフランス、ドイ
ツ、イギリス、オランダの4か国を巡回した回顧展で
した。2006年にはオルセーで大規模なドニ展(カ

モーリス・ドニ《花飾りの舟》1921年
油彩・カンヴァス 愛知県美術館

ナダ、イタリアに巡回)があり、装飾の紹介にも力が
入れられ、話題になりました。その後もドニへの関心
は確実に高まっています。しかし対象に近すぎると
全体が見えないということもあるのでしょうか。作家
像は今もなお茫洋としている感があります。思いき
って、日本ほど遠く離れた地点から眺めてみれば、逆
説的にその本質がよく見えるのではないかなどとい
う思いも湧いてきます。

今回、新潟県立近代美術館と久留米市美術館と
の共同企画で「日本が見たドニ | ドニの見た日本」を
開催します。モーリス・ドニの生涯を軸とする時系列
で全体を構成し、各時代におけるドニと日本の出会
いをひもといていくという試みです。鏡像関係のよう
なタイトルには、作家の人生と日本を合わせ鏡のよ
うにかざすことにより、従来見えなかったドニの実像
を浮かび上がらせるという意図を込めています。

全体は3つの章から成る予定です。第1章では、若
き日のドニが「ナビ派」を結成した時代を取り上げま
す。ドニやボナールらが新しい絵画の創造を目指し
ていた頃、後に「日本洋画の父」と呼ばれる黒田清輝
が留学生としてパリにいて、同時代の美術の動向を
見つめていました。両者の交錯をたどるスリリングな
章です。第2章では、グループとしてのナビ派の活動
が収束し、それぞれの道を歩み出した日々を追いま
す。ドニが教鞭をとった画塾では多くの日本人が学
び、梅原龍三郎も画学生としてドニの警咳に接して

います。第3章では、第一次大戦後のドニに焦点を
合わせます。松方幸次郎など日本のコレクターによ
る西洋美術の収集活動が盛んになり、ドニの作品を
日本国内で目にする機会も増えていきました。

ドニは初期から晩年にいたるまで日本との関わり
が深く、しかも一方通行ではなく、互いにリスペクト
し合う稀有な存在でした。今回出品される作品や資
料の多くが、両者の幸福な関係を物語っています。ド
ニの生涯を正當に紹介する展覧会を開催することは
可能なのか—この問いに対する答えは、作品と作
品の間に通い合う空気をゆっくりと感じながら、ぜ
ひ会場でたしかめていただければと思います。

(専門学芸員 平石 昌子)

■予言者？ 預言者！
——モーリス・ドニとナビ派について

1888年、パリ生まれの画家ポール・セリュジエが
ブルターニュ地方のポン＝タヴエン村に滞在した時、
ポール・ゴーガンの助言のもと一枚の風景画を描き
ました。パリに戻ったセリュジエが当時通っていた画
塾アカデミー・ジュリアンの仲間たち——ポール・ラ
ンソン、ピエール・ボナール、モーリス・ドニら——にそ
の作品を見せると、彼らはその斬新な表現に衝撃を
受け、彼らを中心に「ナビ派(Les Nabis)」が結成さ
れたのです。翌年にはエドゥアール・ヴエイヤールらも
そこに合流しました。

「ナビ」は、ヘブライ語で「預言者」(nabiあるい
は navi、複数形 nevi'im)を意味します。ナビ派の
画家たちは、師ゴーガンを「預言者」と崇め、また、
お互いを「つややかな髭のナビ(Nabi à la barbe
rutilante)」〈セリュジエ〉、「日本びいきのナビ(Nabi
très japonard)」〈ボナール〉等のニックネームで
呼び合いました。ドニの渾名は「美しきイコンのナビ
(Nabi aux belles icônes)」で、彼の簡素で古風
な作風に由来します。

ナビ派最年少のドニは、優れた理論家としても知
られました。1890年『芸術と批評』誌上で彼が打
ち出した理論(絵画とは、軍馬や裸婦、何らかのエピ
ソードである前に、一定の秩序のもとに配された色
彩により覆われた平面である)は「ナビ派宣言」とも
呼ばれ、20世紀のモダニズム美術に先鞭をつけるも

のと評価されました。ただし、彼らが自称した「ナビ」
は、「予言者」(未来のことを言い当てる者)というより
も、ヘブライ語本来の「預言者」(神の言葉を預けられ
た者)の意味合いを持つものでした。秘密結社のよう
に奇妙な衣装をまとい、「神殿」と呼ばれるランソンの
アトリエに集った彼らは、神秘的なものへの憧れ、
美や善に対する信念、あるいはそれに伴う高揚感(宗
教的法悦)といったものを共有していたのです。

今回の展覧会では、当館所蔵作品として、画商ア
ンブロワーズ・ヴォラールの依頼により、同じ年に、同
じ形式で出版された3人のナビ派画家による版画集
も紹介します。ドニの《アムール(愛)》は、画家自身の
日記の記述を下敷きに、婚約者マルトへの愛を綴った
もの。彼はマルトへの恋愛感情を殆ど宗教的なもの
にまで高め、彼女を聖女のような気高い存在として
描きました。ボナールの《パリ生活の諸相》には日
常生活のささやかな情景が活写され、ヴエイヤールの
《風景と室内》には色鮮やかな壁紙の室内やパリの
近代的街景が切り取られています。それぞれ異なる
魅力を放つ画家たちの表現を楽しんでいただければ
と思います。

(主任学芸員 長嶋 圭哉)

モーリス・ドニ《アムール(愛)》より
(2. 物腰は優しく清らかな)
1892～99年
1899年刊行・当館蔵

企画展「日本が見たドニ | ドニの見た日本」

2024年8月27日(火) ～10月20日(日)

2024年度の展覧会から

まずは企画展から紹介します。全国を巡回中の展
覧会がいよいよ新潟へ! 「ジブリパークとジブリ展」
(4/17～6/9)では愛知県の愛・地球博記念公園
内に開園した「ジブリパーク」の誕生の舞台裏を紹
介するとともに、その制作現場を指揮した宮崎吾朗
監督が手掛けたこれまでの仕事と作品も振り返り
ます。「生誕100年 山下清展 一百年目の大回想」
(6/29～8/18)は、「日本のゴッホ」とも称された放
浪の画家・山下清(1922ー1971)の画業と人生を
振り返る大回顧展。日本の原風景や名所を貼絵で
表現した代表作に加え、油彩や陶磁器、ペン画、子
ども時代の鉛筆画なども展示します。《長岡の花火》も
長岡の地に帰ります。どうぞお見逃しなく。

次に、「皇室の名宝と新潟 一皇居三の丸尚蔵館
収蔵品でたどる日本の技と美」(2/7～3/16)では、
皇室に伝えられてきた貴重な美術品を保存、調査研
究、公開する施設である皇居三の丸尚蔵館の収蔵
品を紹介します。近世絵画の名品や近代の油彩画、
日本画、工芸作品を展示するほか、新潟ゆかりの作
品や明治天皇の北陸巡幸写真/パネルの展示などを
通して新潟と皇室の関わりも紹介します。

コレクション展も多彩なテーマで所蔵品の新たな
魅力を発掘します。第1期(4/12～6/23)に開催す
る「日本女性の姿ー労働と肖像」では、明治から昭
和にかけての日本女性の姿をテーマにした作品を展
示。大きな社会変化のあった時代を生きた女性たち
の姿の模様を見るとともに、その時代背景を探りま
す。同時に開催する「没後50年 難波田史男 青春
の思索」では、詩情豊かなイメージの世界を水彩
とインクでみずみずしく描き出した難波田の初期か
ら晩年までの作品を一堂に紹介します。

第2期(6/28～8/18)の「旅する新潟」は、新潟
の風物を主題とした作品を展示し、様々な作家たち
がとらえた新潟の風景を旅するように楽しんでいた

編集部からのひとこと

開館30周年事業の準備のため、この30年間に撮られた記録写
真を片端から見ていきました。華々しく開館した近美の往時の姿に
は驚くばかり……。でも、近美はまだまだ30才! 不惑を目指して、次
の10年へと前を向いて歩みを進めていきたいと思います。
(主任学芸員 飯島 沙耶子)

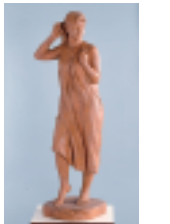
だけです。作品にまつわるクイズを解きながら美術
館をめぐるイベントもあわせてお楽しみください。

第3期(8/27～12/15)では、家族みんなで楽しめ
る「親と子のワクワク美術館 はい、ポーズ!」を開催
します。美術作品に登場する様々なポーズの人々にな
りきって、体全体で作品を鑑賞してみましょう。

第4期(12/24～3/30)に開催する「シークレ
ット・ガーデン」では植物や庭園の風景を主題にした
作品を展示します。作品の前に佇んで、様々な庭を
味わっていただきたいと思います。

31日目に入った近代美術館。ワクワクする展覧会
を揃えて皆様のお越しをお待ちしております!

(主任学芸員 飯島 沙耶子)

山下清《長岡の花火》1950年、貼絵
©Kiyoshi Yamashita / STEPeast 2024
〔「生誕100年 山下清展 一百年目の大回想」より〕下村観山《光明皇后》1897年
皇居三の丸尚蔵館収蔵
〔「皇室の名宝と新潟」より〕三浦文治《佐渡のイカ千し》1938年
(コレクション展「旅する新潟」より)林昭三《おと》1989年
(コレクション展
「親と子のワクワク美術館
はい、ポーズ!」より)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第57号

編集・発行 THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL0258-28-4111代 FAX0258-28-4115

https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/

X @niigata_kinbi Instagram niigata_kinbi

制作・印刷 吉原印刷株式会社

〒940-1164 新潟県長岡市南陽2丁目 949-13

長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大

発行日 2024年4月26日

特集1

2023年度を振り返って①
新潟県立近代美術館 開館30周年事業

1993年7月15日に千秋が原ふるさとの森に開館した近代美術館。2003年7月12日に朱鷺メッセ内に開館した万代島美術館。2023年に30周年、20周年を迎えた両館では、さまざまな周年イベントを実施し、記念の年を彩りました。

本県出身のデザイナー・五十嵐祐太さん(アドハウスパブリック)がデザインを手がけた、周年記念ロゴマークをあしらった缶バッジは、両館で来場者にプレゼントを行いました。笑顔と周年の数字を組み合わせたマークは、年間を通してさまざまな場所に登場し、見かけた方も多いのではないのでしょうか。

近代美術館では7月15、16、17日の3日間、館内ロビーでお得な“本”に出会える「ボン・ボン・マルシェ」を開催。当館の過去図録をお得に購入できる「図録セール」、友の会主催による「古本市」2つのブースが賑わいました。図録セールでは、この機に大量の図録を購入した強者も。開館記念展「大光コレクション展」(1997)の図録や、絵巻を繰るように読む「絵本と絵巻展」(1999)の図録が好評でした。古本市では会員有志による、フレンドリーな接客が温

笑顔の周年記念ロゴマークには、「これまでも、これから人も笑顔にさせる」という思いが込められています。これからも多くの人を笑顔にするべく、美術館が新しい1歩を踏み出すための、エネルギーに満ちあふれた周年イベントとなりました。

(万代島美術館主任学芸員 伊澤 朋美)
※前当館主任学芸員



次の周年へ

30周年のコレクション展は、県出身の日本画家横山操の没後50年を記念して、所蔵する全ての作品の公開から始めました。開館記念日を含む第2期には、設立時の諸資料により自らの基盤をしっかりと確認しました。一方、企画展では、県関連作家に関する日ごろの調査研究を結実させ、知人ぞ知る日本画家橋本龍美の個性的な世界観を紹介し、また、明治期の海外留学生の一人、彫刻家武石弘三郎の堅実な業績に光を当てました。派手さを抑えて確かな歩みを刻んだ周年と、総括できるでしょう。

近美30年に万美20年を併せると、両館で半世紀分の活動になります。県民の皆様に望まれる美術館とはどのような施設なのか。時代の要請により回答は変わるはず。とは言え、記念ロゴのような笑顔が見られる美術館でありたいと思います。

(館長 桐原 浩)

特集2

2023年度を振り返って②
企画展関連イベント

①「望郷の画家 橋本龍美展—神も、庶民も、バケモノも」より

「さがすとみつかる 作者のココロがみえてくる!」5月1日(月)
「お絵描き好きな子 集まれ 変身!お化け地蔵」5月5日(金・祝)

橋本龍美展では2つの異なるワークショップを実施しました。一つは一般向けの「さがすとみつかる 作者のココロがみえてくる!」で、対話型鑑賞の手法を使った鑑賞のワークショップです。橋本龍美の作品は、描き込みが多く、じっくり見るといろいろなものが見つかります。いくつかの作品をピックアップして、何が描かれているか、また加筆前の作品と比べてたりしながら、リラックスしながら皆で楽しく話し合いました。

もう一つは、こどもワークショップ「お絵描き好きな子 集まれ 変身!お化け地蔵」です。橋本龍美が生涯描き続けたお地蔵さんは、常にキツネやカッパが化けた姿でした。時には得体のしれない妖怪のことも……。これにあやかり、自分でも変身するお地蔵さんを描いてみようというのがこのイベント趣旨です。お地蔵さんの頭、胴体、足部分をモニタージュするように、切り込みを入れた紙に、お地蔵さんと妖怪を描きました。親子連れや一家での参加が多く、大人も子供も、楽しい作品を描きました。

(専門学芸員 宮下 東子)



②「華麗なるパリ ベル・エボック展—フランス・モダン・ポスター」より

親子で版画ワークショップ「リトグラフでミュシャのポスターをつくらう!」8月11日(金・祝)

フランス・モダン・ポスターの多くはリトグラフの技法で刷られています。しかし、その技法を知る機会は極めて少ないのではないのでしょうか。そこで、長岡造形大学美術・工芸学科の岡谷敦魚准教授をお招きし、リトグラフの原理を体験するワークショップを開催しました。アルミ板を使って、ミュシャのようにアール・ヌーヴォー風の模様で装飾された素敵なポスターづくりを体験するという内容です。親子を対象としたワークショップということで、作業工程は極力シンプルになるよう工夫しました。凹凸のない板が、薬品を使用することで版になるという技法の体験が、新鮮で興味深かったという感想がありました。



体験後に展覧会を見ると、また新たな発見があるという感想もありました。19世紀の版画やポスターに親しむ貴重な機会となり、作品への理解を深める効果も得られました。

(前当館副参事 金澤 健志)

③企画展「ベルギーと日本—光をえがき、命をかたどる」より

ミニレクチャー&作品実地見学会「友情の双像」10月21日(土)

「ベルギーと日本展」では関連イベントとして、彫刻家・武石弘三郎のベルギー留学を支援した、兄・貞松と、外交官・堀口九萬一の友情を讀んで武石により制作されたブロンズ像、《友情の双像》の実地見学会を行いました。イベントではまず、武石に関するミニレクチャーを中之島コミュニティセンターにて実施。コミュニティセンターのロビーには中之島の個人所蔵の、武石作品や貞松・九萬一の書などが展示され、参加者を楽しませました。

その後貸切バスで中之島の若宮神社へ移動し、双像を見学しに行きましたが、外は横殴りの大雨!冷たい雨から逃れるように短時間で見学を済ませ、すぐにコミュニティセンターへと戻らざるを得ませんでした。前日までの天候が穏やかだっただけに、なんという悪運を引き当てたかと悔やみましたが、アンケートには、「地元の偉人を知ることができてよかった」「勉強になりました」など温かい言葉の数々が。地域に残る知られざる作品を掘り起こす機会となったことを、感慨深く感じました。

(万代島美術館主任学芸員 伊澤 朋美)

※前当館主任学芸員



特集3

2023年度を振り返って③
大人のための日本画ワークショップ

コレクション展第4期「近代美術館の日本画の名品」では、開館30周年を記念して当館の日本画の名品を一挙に展示しました。この展示に関連したイベントとして、「大人のための日本画ワークショップ」を新潟県立美術館友の会と共催で、全5回開催しました。その様子を紹介します。

第1回「実践 掛け軸の扱い方・飾り方」1月21日(日)
講師:神尾 顕斗氏(表具師)

新潟市内で表具店「神尾萬正堂」を営んでいらっしゃる表具師の神尾顕斗氏を講師に迎え、掛け軸の扱い方や飾り方について実践を交えて教えていただきました。

表装に使う道具や貴重な裂も実際に見せていただくことができました。「掛け軸は雨の日にはしまわないで」など、家庭での掛け軸の保管の仕方について伺った際には、質問が多く出ました。参加者は実際に神尾さんが表装した掛け軸を使い、飾ってから箱にしまうまでもに挑戦。手順を確かめながら慎重に掛け軸を扱っている様子が印象的でした。



第2回「構造を知る ミニ掛け軸を作ろう」2月4日(日)
第3回「構造を知る ミニ屏風を作ろう」2月18日(日)
講師:宮下 東子(専門学芸員)

ミニ掛け軸と屏風に実際に作りながら、その構造を知るワークショップを当館の学芸員が講師となって開催しました。実際には、数多くの工程を経て仕立てられている掛け軸や屏風ですが、今回は短時間でも作れるように工夫しています。参加者それぞれが、表装する作品や裂(今回は和紙)を選び、楽しみながら制作しました。参加者からは「すてきな掛け軸を作ることができて感激しました」などの感想が聞かれました。ミニ屏風には苦戦された方もいましたが、広げたり畳んだり自在にできる屏風の仕組みを理解していただくことができました。



第4回「素材を知る 岩絵具を使ってみよう」3月3日(日)
第5回「素材を知る 金銀箔を使ってみよう」3月17日(日)
講師:財田 翔悟氏(日本画家)

日本画家の財田翔悟氏を講師に迎え、日本画の画材を使って作品を制作しました。第4回では、岩絵具や膠などについて財田さんから説明を受けた後、参加者それぞれが実際に指を使って岩絵具を練り、下絵にそって桜の花に色を塗りました。

第5回では、金銀箔を色紙に貼る「平押し」に取組みました。薄い箔を一枚ずつ剥がす作業は少し難しかったようです。さらに網を張った竹筒を使って砂子を散らすのにも挑戦。前回、自分で描いた桜の絵に砂子を散らして、素敵な作品を完成させた方もいました。

大好評だった全5回のワークショップ。日本画をちょっと身近に感じていただけたのではないのでしょうか。

(主任学芸員 飯島 沙耶子)



特集4

2023年度新収蔵作品紹介

橋本龍美《望郷四季》1986年

昨年春に開催した回顧展を機に、6点の橋本龍美作品が当館に新しく収蔵されました。その中から1点の作品をご紹介します。

橋本龍美は、新潟県加茂市出身の日本画家です。33歳の時に故郷を捨てるようにして上京しますが、その後七転八倒の末確立した自身の画題は、ずばり加茂そのものでした。

はじめ龍美の心の多くを占めていたのは、毎夜乳母から聞いた夜啼のバケモノでした。多くモチーフとなったのは、路傍のお地蔵さんや、年に一度の加茂祭に関するもの——通りを練歩く傘鉾の行列、見世物小屋の怪しげな出し物、サーカス——でしたが、それらの殆どに夜啼のバケモノの姿が重ねられていました。やがて、その関心は加茂の自然へと移り、さらにそこに暮らす庶民の営みへと移っていきます。

本作は、加茂の自然を描きつつそこに暮らす人々に思いを馳せるようになった頃の作品です。加茂の家々を高いところから俯瞰した形で描いています。

家の壁は描かず、人々がそれぞれ何をしているのか、何を生業としているのかが見えています。稼業に勤しむ職人、子守りをするおばあちゃん、元気いっぱい遊ぶ子供たち、洗い物をしながら井戸端会議中のおばちゃんたち……。庶民たちの日々の営みがここにあります。龍美の脳裏には、幼い頃の、身の回りで生き生きと暮らしていた具体的な人々の姿が浮かんでいたに違いありません。画面中央上部には人々を見守る神様——青海神社が鎮座します。

人々の暮らしを取り巻く自然にも注目しましょう。春の訪れを告げる露の臺、満開の桜、桐の花、秋に色づくもみじ、実る柿、ザクロ、カラスウリ、そして冬の花である椿……。ここでは四季折々の花が爛漫です。そして、山に目をやれば、キツネやウサギなどの野生の獣が、そして右上には狐の嫁入りという怪奇現象までが描かれています。

この屏風には、橋本龍美にとつての故郷すべてが詰込まれているのです。龍美の望郷の熱い思いがひしひしと伝わってきます。

(専門学芸員 宮下 東子)



橋本龍美《望郷四季》1986年

表紙の作品

女性は、パーマメントをあてた洋髪をきっちりと分け、袖口の開いたワンピースの洋装にネックレスをして着飾っています。昭和初期頃、こうした西洋的出で立ちが都会で流行し、当時、モダンガール(モガ)と称されました。時代の先端を行く女性は、洋花瓶が置かれたテーブルに肘をつきもたれかかり、煙草を吸うなど、モガの気だるい雰囲気漂わせています。この頃の高村の作品には、希展出品作を含め、女性像に世相を託した作風を見ることができます。

(学芸企画課長 松矢 国憲)

(コレクション展「日本女性の姿—労働と肖像」より)



高村真夫《女》1920年代後半